

国際交流学習のためのワークショップ型研修の開発

Development of a teacher training program for international collaborative learning

清水和久
Kazuhisa SHIMIZU

稲垣忠
Tadashi INAGAKI

塩飽隆子
Atsuko SHIWAKU

岸磨貴子
Makiko KISHI

石川県教育センター
Ishikawa Prefectural Institute
for Education Research and
In-Service Training

東北学院大学教養学部
Faculty of Liberal
Arts, Tohoku-gakuin
University

ジャパンアートマイル
Sherry's Kids
English School

関西大学大学院
Graduate school of
Kansai University

<あらまし>

外国の教師が日本の学校と交流学習を進めるにあたり必要な単元設計を、具体的な学習活動カードを提示することで短時間に作成できる用に工夫し、日本との交流学習についてのイメージ化を図った。結果、単元設計プロセスにおける留意点として、「実施時期の調整」「交流の成果物のイメージ化」「双方のコミュニケーション場面の設定」の3点が必要であることがわかった。

<キーワード> 国際交流学習 共同制作 カリキュラム ワークショップ

1. はじめに

国際交流学習は、ICT活用が学習者間のコミュニケーションに不可欠な学習方法である。ICTの整備が進むにつれ、技術面のハードルは確実に低くなり、誰もが“Global Village”を実感できる環境が整いつつある。

ところが実際に国際交流を取り入れるには、相手校探し、交流時期の調整、既存の学校のカリキュラムとの調整など、多くの課題がある。笹尾ら(2007)は、国際交流学習のWebサイトを分析し、授業設計、手だて、カリキュラム、ICT、広報などの支援がされていることを明らかにしている。

本研究では教師が国際交流の授業設計を習得するための教員研修に着目する。交流内容は、「アートマイル」と呼ばれる壁画の共同制作である。共同制作を実現するには、テーマの検討、スケジュール調整や役割分担など、学校紹介や情報交換に比べてより難度の高いコラボレーションが要求される。その結果、より深い相互理解、必要感の高いコミュニケーション、共同で学習をコーディネートする力を育成することが期待できる。

清水ら(2006)は、アートマイルプロジェクトをシリアと日本の小学校において実施し、実践上の課題点を明らかにしている。また、Inagaki et al.(2007)では、2006年度に実践された18のアートマイル実践をもとにモデルカリキュラム

の開発を行った。これらの知見から教員向けの単元開発ワークショップを開発した。モデルカリキュラムをもとに21枚の学習活動カードを用意し、それを教師が配置しながら、実施時期や必要な学習活動を理解できるように支援したのが本ワークショップの特徴である。本研究ではそのワークショップのデザイン及び実施結果を報告する。

2. 研究の方法

2.1 対象

2007年7月21日から25日にかけてカイロで開かれた14th iEARN Annual International Conferenceにおいて2回のワークショップを実施した。1回のワークショップは45分間だった。前時に生徒発表を実施した後、小休憩を挟み継続して参加した教師11名がワークショップに参加した。参加者の国籍はエジプト(3名)、イスラエル(2名)、パレスチナ(2名)、オランダ(1名)、カナダ(1名)、インドネシア(2名)である。

2.2 方法

ワークショップでは以下のような準備物及び進行で実施した。なお、1回目と2回目では進行の仕方についていくつかの改良を加えている。

<準備物>

- ・模造紙(月単位で活動を書き込めるようにした)
- ・学習活動カード(表1)

表1 学習活動カード

Drawing	Activity	Communication
D-1 テーマを決める	A-1 相手の国について調べる	C-1 自己紹介・学校紹介をする
D-2 下絵を描く	A-2 自文化について調べる	C-2 自文化や暮らしを伝え合う
D-3 着色する	A-3 自己紹介・学校紹介の文やビデオレターを作る	C-3 親善大使を交換して様子を伝え合う
D-4 鑑賞する	A-4 自文化や暮らしを伝える文やビデオレターを作る	C-4 共同制作の日程を相談する
D-5 絵を送る	A-5 ニューイヤーカードの交換	C-5 共同で何を描くか相談する
D-6 絵を受け取る	A-6 絵のメッセージを考える	C-6 共同制作の分担を相談する
	A-7 調べたことを絵の内容に活かす	C-7 作品の感想交流
	A-8 活動全体のふりかえり	

- ・概要を説明するプレゼンテーション
 - ・単元開発のステップを示すシート(2回目のみ)
 - ・壁面のサンプル(センチ大のものを1枚用意)
 - ・質問紙(生徒発表及びワークショップの評価)
- <進行>

- 主旨説明(10分程度)
- グループでカードを元に単元開発する(30分)
- 成果を確認し、質問紙に記入する(5分)

2. 3 評価

本ワークショップの評価には、以下の3つの方法を取り入れた。本報告ではb)を中心に報告する。

- 質問紙調査：交流手段、計画、学習成果、教師の役割の理解、参加意欲の5つの観点から4段階で測定した。特に交流希望をもった場合には、その旨、連絡先の記入を依頼した。
- ビデオによる活動記録：活動場面をビデオに記録した。事後に運営担当者がビデオを再生し、進行上の問題点、課題の抽出を行った。
- 制作物の評価：完成したプランについて、カードの順序、実現可能性等について評価した。

3. 結果

ビデオによる活動記録からは、特に第1回の実施の際に以下の問題点を発見することができた。

- 国ごとに冬休み、ラマダン等、休暇時期が異なるため、交流時期の見極めが必要
- 3種類のカードを同時に扱うのが難しい
- 壁面の具体的なイメージが持てない状態では、必要な学習活動を判断しづらい

そこで第2回目には以下に示す5つのステップに沿ってワークショップの進行を調整した。

ステップ1：長期休暇の日程を確認する
 ステップ2：壁面のテーマ・形式を決める
 ステップ3：制作活動の時期を決める
 ステップ4：必要な調査活動を位置づける
 ステップ5：利用可能な交流手段を選ぶ

なお、ワークショップではすべてのグループがプランを作成できたことを確認している。



図1 学習活動カードによるワークショップ

4. おわりに

共同制作を取り入れた国際交流のためのワークショップを開発した。11名の教師が実際に研修に取り組んだ結果、単元設計プロセスにおけるいくつかの要件を明らかにすることができた。

- ・実施可能な時期の調整からはじめる
- ・制作物をイメージした後に流れを検討する
- ・制作活動に合わせて必要な学習、コミュニケーション場面を組み合わせる

以上の結果をもとに共同制作による国際交流学習の研修プログラムを改善し、日本の教員を含め、対象者を増やして評価検証していくことを予定している。

参考文献

- 笹尾真剛・稲垣忠(2007),国際交流学習支援プログラムにおける交流支援 Web サイトの内容分析, JSET07-02, pp85-90
- 清水和久・坂上則子・岸磨貴子・今野貴之(2006), 小学校における日本とシリアとの共同作成画を通じた交流, 日本教育工学会第22回全国大会発表論文集, pp.1013-1014
- T., Inagaki, K., Shimizu, A., Shiwaku, K., Kubota (2007), Development of a model plan for joint production for international understanding education, icome2007 (printing)